

令和元年度国庫補助金

「広島頼家関係資料史料調査 地域活性化のための特色ある文化財調査・活用事業」実施概要

【事業の概要及び目的】

頼山陽史跡資料館が所蔵する「広島頼家関係資料(ひろしまらいけかんけいしりょう)」(通称 杉ノ木資料)は、広島藩の儒学者・文人であった頼春水(らい しゅんすい)から始まる広島頼家に伝わる、近世後期の著述稿本類、文書・記録類、書状類、絵図類・典籍類、書画類、器物類を中心とする資料群で、その数は9,000点近くに及びます。

広島頼家関係資料には、春水や妻・梅颯(ばいし)、子の山陽などを始めとする頼家の日々の暮らしや、文人たちの交遊を詳細に伝えるものが多く、江戸時代後期の広島の政治や文化、生活を語る上で貴重な資料群です。

本事業では、これまで一部の内容が明らかになっているに過ぎなかった資料の悉皆調査を行い、全容を明らかにして日本史上の価値付けを行うとともに、調査結果をもとに広く資料の公開・活用を図ることにより、県民が優れた文化に親しむ環境づくりを目指しています。

【全体の事業期間】

平成 29 年4月から令和3年3月までの4ヵ年

【事業体制】

学識経験者からなる調査指導委員会及び文化庁の指導・助言のもと、頼山陽史跡資料館職員が中心となって調査を進めています。

【本年度総事業費及び補助金額】

総事業費 3,000 千円, 国庫補助金額 1,500 千円

【本年度調査内容の概要】

令和元年度は、主に文書・記録類、書状類の調査を行い、大きさ、形状、品質、資料内容などの項目についてデータを取るとともに、写真撮影を行いました。

これまでに調査した点数は、7,700 点余り(全体の約 86%)です。

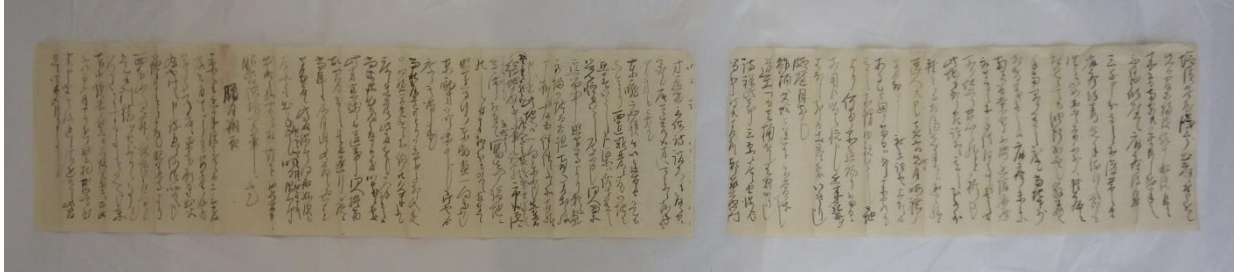
【調査の様子】



【主な調査成果の紹介】

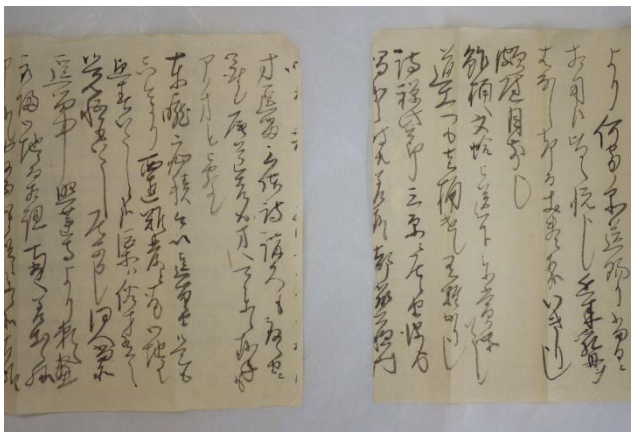
○断簡の接続の確認

令和元年度より、書状類の本格的な調査を実施しています。その結果、資料の糊離れにより、これまで別の書簡の一部と思われていた断簡が接続する事例が少なからず確認されました。

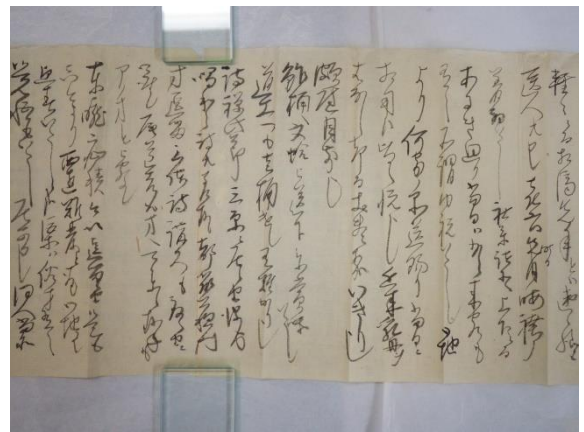


頼春風書簡(杉ノ木資料, 頼山陽史跡資料館蔵)

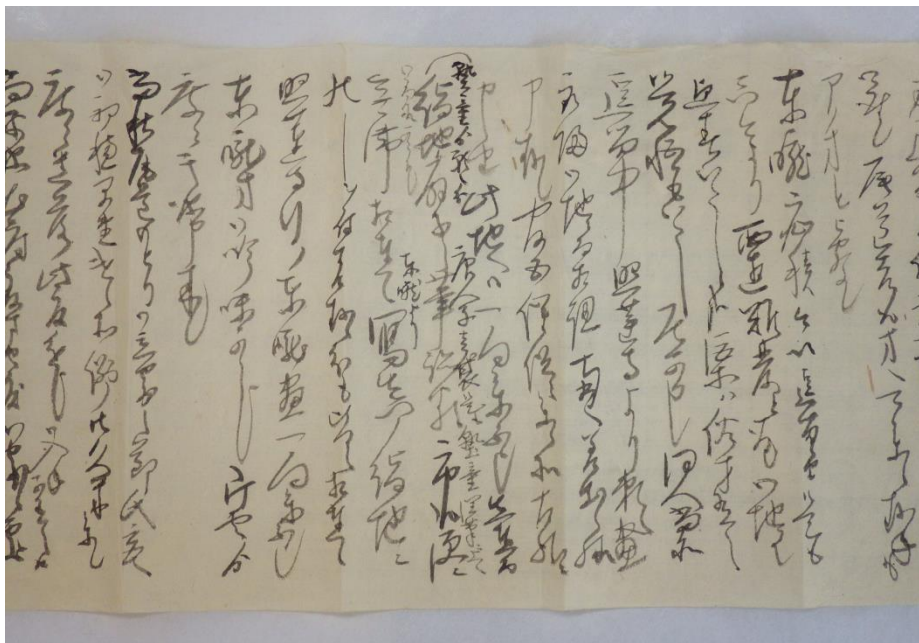
頼春水の弟・春風(しゅんぷう)が記した十二月一日付の書簡。竹原・照蓮寺から作画を依頼された東囃(とうろう)の絵がなかなか届かないことなどが記されています。糊離れにより、これまではそれぞれ別の書簡の断簡と考えられてきました。



接続前



接続後



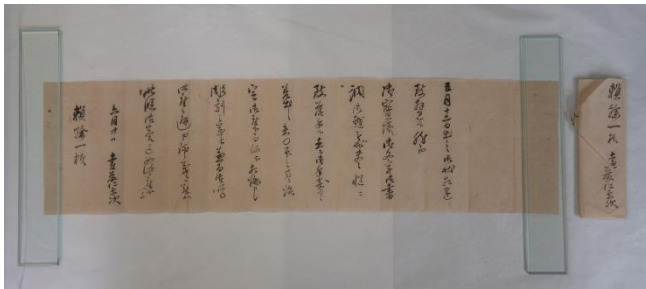
東囃について記された箇所

○淡茜色に染められた広島藩の公用紙「色諸口紙」「色半紙」の役割の解明

広島頼家関係資料の中には、広島藩庁内で作成され、授受された様々な公文書が残されており、その中には淡茜色（薄い赤色）に染められた文書が数多く含まれています。

広島藩では、享保6年(1721)に諸口紙(もろぐちし)と半紙(はんし)を淡茜色に着色したものを藩の公用紙とすることを定めており、県内の旧家に伝えられた古文書群の中にも江戸時代後期から明治時代初めにかけて作成された淡茜色の文書(色諸口紙・色半紙)が数多く含まれていることが知られています。

当館では、文化庁の指導・助言のもと、資料の悉皆調査とともに、色諸口紙・色半紙の使い分けについて詳細な事例調査を行いました。その結果、紙の使用法について享保 12 年(1727)に出された藩の達(たつし)にあるように、包紙には諸口紙ではなく半紙が使用されていたことが、数多くの事例から裏付けられました。



遠藤仁平次が頼餘一に宛てた書付(杉ノ木資料, 頼山陽史跡資料館蔵)

この書付(かきつけ)では、本紙(ほんし, 本文が記された紙)に横半分に切断された色諸口紙が、包紙に色半紙が切断されずにそのまま使用されています。文化8年(1811)に出された藩の覚(おぼえ)には、色諸口紙は「縦九寸七分(29.1 cm), 横壱尺五寸五分(46.5 cm)」, 色半紙は「縦八寸三分(24.9 cm), 横壱尺壱寸六分(34.8 cm)」とあり、色諸口紙の方が色半紙より一回り大きかったことがわかります。そのため、実際にこの書付の包紙を開いてみても、色半紙の縦の長さは、本紙である色諸口紙の二倍の長さには及びません。

広島藩では、半紙に比して諸口紙の方が紙として上位に位置付けられていたため、享保6年(1721)の藩の規定にあるように、包紙には諸口紙ではなく、半紙が使用されるのが一般的でした。

【参考文献】

- ・石川良枝「諸口紙に関する一考察」(『広島県立歴史博物館研究紀要』第 21 号, 2019 年)
- ・石川良枝・地主智彦「江戸時代中・後期における広島藩の杉原紙・諸口紙・半紙について」(『広島県立歴史博物館研究紀要』第 22 号, 2020 年)

○展示による情報発信

平成 31 年度収蔵品展「頼山陽と三人の息子たち」において、広島藩の「色諸口紙」と「色半紙」の使用例について紹介する速報展(4月 27 日～5月 26 日)を開催しました。



○論文等による情報発信

公用紙を中心とした広島藩の紙について、論文等で調査・研究の成果を公表しました。

- ・渡部史之「広島藩の公用紙研究についての展望―「広島頼家関係資料史料調査事業」から―」
（『雲か山か』第 113 号、公益財団法人頼山陽記念文化財団、2019 年）
- ・石川良枝「シーボルトが持ち帰った広島藩の和紙」（同上）
- ・石川良枝「頼家の紙」（『雲か山か』第 114 号、2019 年）
- ・石川良枝・地主智彦「江戸時代中・後期における広島藩の杉原紙・諸口紙・半紙について」
（『広島県立歴史博物館研究紀要』第 22 号、2020 年）

これらも調査成果を、当館の展示などで随時情報発信してまいります。

制作：頼山陽史跡資料館



本事業は、文化庁地域活性化のための特色ある文化財調査・活用事業国庫補助金の交付を受けて実施されています。

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2019